亀井南冥の息子たち

太宰府の文華
～公文書館だより⑩③～

大宰府政庁跡に建つ「太宰府碑」の文章を起草した、江戸時代の儒学者亀井南冥（1743～1814）については『太宰府人物志』と本年の公文書館パネル展でも紹介しましたが、今回はその息子たちを取り上げます。

南冥には、昭陽（1773～1836）、雲来（1774～1825）、大年（1777～1812）という3人の息子がいました。福岡藩藩校甘棠館の館長であった南冥が、突如役を解かれ蟄居処分となった後、家督を継いだのは長男の昭陽です。彼は父の学問を深化し大成させるとともに、門人の育成にも力を注ぎました。次男の雲来は、幼くして仏門に入るも、後に還俗して医師となり、太宰府で開業。三男の大年は、姪浜でこちらも医師として活動しました。

昭陽の塾に学び、亀井家と親しかった日田の学者広瀬淡窓は、自著『懐旧楼筆記』で三兄弟について次のようなことを書いています。

○昭陽先生は、南冥に似た豪胆な気性で、物事に対して憤る心は人一倍激しい。しかし、父親がそれで罪を被ったことから、本来の気性を抑え自分を律している。父母によく仕え弟たちを大切にしている。

○大壮（雲来）は、兄弟の中で最も寛容な気持ちの持ち主である。

○大年は、才気煥発過ぎて傲慢であり、礼節というものに我慢できない。

このように性格は異なるものの、兄弟仲は大変良く、助け合いながら父親を支えました。また、三人そろって詩文の才に恵まれており、父南冥、叔父曇栄と合わせて「五亀」と称されるほどでした。

宰府村に暮らした雲来は、医業の傍ら、私塾「雲来社」で子弟の教育を行いました。太宰府の医師中川昌沢も少年時代に雲来に学んだ一人です。公文書館の中川家文書には、昌沢が書き写した『雲来詩集』が残されています。これを見ると、若き日の雲来の交友関係や心情が窺えるとともに、兄昭陽、弟大年を詠んだ漢詩からは、兄弟に対する細やかな愛情を読み取ることができます。

【バックナンバーはこちら】
ページID7241

太宰府市公文書館　荻野　寛美